火山列島の思想

益田勝実

筑摩書房

益田勝実　ますだ　かつみ
1923年 山口県に生まれる
1951年 東京大学文学部国文学科卒業
現　在 法政大学文学部教授
著　書「説話文学と絵巻」（三一書房）
編　書「民俗の思想」（現代日本思想大系
　　筑摩書房）「柳田国男」（同上）

■

火山列島の思想
©益田勝実　1968
昭和43年7月26日　初版第1刷発行
著　者　益田勝実
発行者　竹之内静雄
発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123　TEL（291）7651（代）
郵便番号　101—91
印刷・暁印刷　製本・山見製本

■

定価 650 円

もくじ

黎　明　――原始的想像力の日本的構造――　5
幻　視　――原始的想像力のゆくえ――　21
火山列島の思想　――日本的固有神の性格――　56
廃王伝説　――日本的権力の一源流――　75
王と子　――古代専制の重み――　119
鄙に放たれた貴族　133
心の極北　――尋ねびと皇子・童子のこと――　159
日知りの裔の物語　――『源氏物語』の発端の構造――　173
フダラク渡りの人々　198
偽悪の伝統　221
飢えたる戦士　――現実と文学的把握――　240
あとがき　265

裝幀　石岡瑛子

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

火山列島の思想

黎　明

――原始的想像力の日本的構造――

黎明の異変

原始社会における日本人の想像力の状況は、今日からはにわかに推測することができない。それは、ことさらに揣摩臆測を事とするものでなければ、あげつらう勇気を持ちえぬほど、確かな手がかりの少ない、茫々たるそのかみのことである。しかし、すべてが湮滅しさり、埋没しはてたかに見える原始の日本人の想像法が、ずっと後々まで強力に生き続けて、日本人の想像のひとつの鋳型の役割を果たしていることもあり、生き続けてきていると、かえってその古さに気づかないから、奇妙なものである。わたしたち日本人の脳裏では、実に永い間、闇の夜と太陽の輝く朝との境に、なにか特別な、くっきりした変り目の一刻があった。異変が起きるのは、いつもその夜と朝のはざま、夜明けの頃でなければならなかった。

夜が明ける――伝承の世界では、それはずっと後世までも、単なる時間の推移ではなかった。第一に、それは鬼の退場の時刻であった。

鬼、よりて、「さはとるぞ」とて、ねぢてひくに、大かたいたき事なし。さて、「かならずこのたびの御遊びに参るべし」とて、暁に鳥などなきぬれば、鬼共かへりぬ。翁顔をさぐるに年比ありし瘻、あとなく、かいのごひたるやうに、つや〳〵なかりければ、木こらんことも忘れて、家にかへりぬ。(『宇治拾遺物語』「鬼に瘻とらるゝ事」)

「こぶとり」の鬼は、爺の頬から瘤をもぎとって帰っていった。夜明けに鳥たちが鳴きはじめたからである。こういう話の運びをあたりまえしごくに思い、少しもふしぎと感じないのが、わたしたち日本人である。鳥が鳴きはじめて帰っていかない鬼の話など、日本ではありえない。ところが、実際に山の中に泊まって実験してみると、日の出まえ一時間ぐらい、小鳥たちがあちらこちらで囀り、チーチビ、チーチビ、ツピ、ツピとにぎやかだが、またいつのまにか静かになり、朝がきているのである。村里の鶏のコケコーローのように、そら鳴いた、といったきわだったものではない。そのいつのまにやら始まるチーチビ、チーチビ、ツピ、ツピに聞き耳を立てて、あわてて退参する「こぶとり」の鬼どもは、敏感で繊細な神経の持ち主ということになる。

鬼どもはなぜこうも敏感なのか。それはさておいても、第二に、一度夜が明けたら、かれらのやりかけた仕事はそこで停止してしまわねばならない。それは、それ以後の継続も許されないし、

やり直しも決して認められないのである。各地にある鬼の築いた九十九段、もしくは九百九十九段の石段の伝説でも、問題は夜が明けたという点にある。

羽後国男鹿半島に、神山、本山といふ二つの山がある。どちらも、峻しく容易に登れないが、不思議なことには、神山の方には、昔から九十九の石段が出来てゐる。素晴らしい大きい石の石段で、迚も人間業とは思へぬ位の工事である。

昔、神山の奥深くに、一匹の鬼が棲んでゐて、毎年々々、近くの村に現れて、田畑を荒すので、村の者は困り果て、鬼に向つて一つの難題を持ち出した。其難題といふのは、鬼は一晩のうちに、百の石段を神山に築上げることで、若しそれが出来なかつたら、此から後は、決して村へ出て来てはならぬ、其代り、若し百の石段が出来たら、此から後は、毎年人間を一人づゝ鬼に食はせる、と云ふ約束であつた。鬼は此約束を承知して、或夜、石段を築きだした。何しろ、一生懸命である。見るうちに、工事が捗つて、九十九の石段が見事に出来上つた。ところが、今一段と云ふところに成つて、一番鶏が啼いて、東雲の空が明るく成つた。鬼は驚いて、姿を晦した。（高木敏雄『日本伝説集』一九一三年）

鶏が鳴いて夜が明けたので、九十九パーセント完成している仕事が永遠の未完成工事になってしまう。夜から朝へ、朝からまた昼・夜へと時間は流れていくであろうに、この夜明けの境界線での中絶は再興が許されない。永遠の凝固が見舞う。時間はそこで立ち止まるのである。

夜明けという、夜と朝の間を断つふしぎな断絶のクレバスの底知れない深み。――そこではどのような魔力ある者のやりかけの仕事も、すべて停止するばかりか、一瞬にしてそのまま岩となり、山となる――これが第三の約束事である。役の行者が紀伊半島の突端の串本から大島へ橋をかけた時もそうだった。もう少しのところで夜が明けた。作りかけの橋杭すべてが岩と化した。有名な橋杭岩の伝説だが、魔性の者どもの魔力の限界、そこでの永遠の中止、すべての状況のさながらの凝固――わたしたちの国では、そういう夜と朝のはざまでの異変の想像を当然のこととして受け容れる体質が育っており、疑いをさしはさむ人はごくまれであった。

黎明の異変という想像のしかたは、ずっと溯って『常陸国風土記』の「うなゐの松原」の伝説でも、重要な想像展開の基軸をなしている。夜が明けるということ、朝が訪れるということは、なぜそのように重大なのであろうか。

その南に童子女の松原あり。古、年少き僮子ありき。俗、加味及乎止古・加味及乎止売といふ。男を那賀の寒田の郎子と称ひ、女を海上の安是の嬢子と号く。竝に形容端正しく、郷里に光華けり。名声を相聞きて、望念を同存くし、自愛む心滅ぬ。月を経、日を累ねて、燿歌の会、俗、宇太我岐といひ、又、加我毗といふに、邂逅に相遇へり。時に、郎子歌ひけらく、

いやぜるの　安是の小松に
木綿垂でて　吾を振り見ゆも

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

安是小島はも
嬢子、報へ歌ひけらく、
潮には　立たむと言へど
汝夫の子が　八十島隠り
吾を見さ走り

便ち、相語らまく欲ひ、人の知らむことを恐りて、遊の場より避け、松の下に蔭りて、手携はり、膝を伏ね、懐を陳べ、憤を吐く。既に故き恋の積れる疹を釈き、還、新しき歓びの頻なる咲を起こす。……玆宵玆に、楽しみこれより楽しきはなし。偏へに語らひの甘き味に沈れ、頓に夜の開けむことを忘る。俄かにして、鶏鳴き、狗吠えて、天暁け日明かなり。爰に、僮子等、為むすべを知らず、遂に人の見むことを愧ぢて、松の樹と化成れり、郎子を奈美松と謂ひ、嬢子を古津松と称ふ。古より名を着けて、今に至るまで改めず。（香島郡）

「神のをとこ」「神のをとめ」と呼ばれた那賀の寒田のいらつこと海上の安是のいらつめは、神に仕え、神の代弁者となる聖少年・聖処女であったかもしれない。それゆえにその密会を人目にさらすことができないにしても、「愧ぢて、松の樹と化成れり」というような神異力を具えているのは、どうも少年少女自身ではないらしい。わが国では、その時刻には、そのようなメタモルフォーシス（変態）が可能になるというとりきめがあったのである。問題はあくまで夜明けとい

う時刻の方にある。

原始的時間構造の想像力規定

大晦日の晩を年の夜と称した。家々晩飯に御馳走を拵へ家族揃つて之を食べた。御膳には何か意味は分らぬが、葱の白根をおき、箸を取る前に指で一端を裂いて「ハブの口開けよ」と云つた。晩飯によつて人々は年を一つとつたものとされた。（佐喜真興英『シマの話』一九二五年）

沖縄で、おおみそかの夜、晩飯を食べるとすでに新しい年齢をひとつ加えたことになる、と考えられていたということは、まだ遠くないごく少し昔のものの考え方だが、実は、これにも原始社会以来の思考法が残留している。早く柳田国男の指摘したように、わが国の原始の一日は、夜の闇のとばりが地上を覆うときから始まったらしい。日の出に始まる一日の朝から夜へという時の流れ方は、むしろ後の時代のもので、夜から朝へと時が流れていくのがより古い一日のあり方であった、とみられる。佐喜真興英の記録している沖縄の新年の訪れ方は、そのことをよく伝えている、といえよう。「西洋の年の境は夜中の零時かも知れず、支那では朝日の登りを一日の始めと考へて居たかも知らぬが、我々の一年は日の暮と共に暮れたのである。それ故に夕日のくだちに神の祭を始め、その御前に打揃った一家眷属が、年取りの節の食事をしたのである。日本人の祭典には必ずオコモリといふことがある。神の来格を迎へて、謹慎して一夜を起き明かすこと

である」（柳田国男『新たなる太陽』「年籠りの話」一九五六年）という一日の始まり方は、もの日の場合だけでなく、つねの日もまたそうであったろう。そして、夜は〈聖なる半日〉として、一日の最初の部分を占めていたらしい。単なる睡眠の時間ではなかったようである。

わが国の原始社会の夜については、まだ少しも解明の試みはなされていないけれども、レヴィ・ストラウスはブラジル奥地のボロロ族の夜について、次のように報告している。

ボロロの村では、一日の中にひじょうに大切に思われている時間がある。それは夕方の呼び出しである。日が暮れると、踊りの広場に家長たちが集まってきて、そこで焚火をする。伝令が大きな声で各集団の名を呼ぶ。バデッジェバ（酋長）、オ・チェラ（イビ鳥の頭）、キー（貘の頭）、ボコドリ（タトーの頭）、バコロ（英雄バコロロの名）、ボロ（飾り棒の頭）、エワグドウ（ビュリティ棕櫚の頭）、アローレ（毛虫の頭）、パイウエ（針鼠の頭）、アピボーレ（意味不明——原註）……彼らが出頭して来るに従って、一番遠い家々にまで言葉が聞えるくらいの高い声で、明日の命令が関係者に伝えられる。それにこの時間には、家には誰もいないか、ほとんど空っぽである。蚊がいなくなる日没と共に、六時頃にはまだ皆が一しょにいた住居から出はらっていた。一人一人、手に手に筵を持って、男たちの家の西側にある丸い大きな広場の踏み固めた地面に横になりに行くのだ。ウルクを塗りつけた体に永い間触れているので、オレンジ色の染みついた木綿の掛け蒲団にくるまって、皆が寝る。そこでは、保護局はそこにいる者の一人でも見分ける

ことは難しいだろう。大きな筵の上には、五、六人が一しょに横になって、ほとんど言葉も交わさない。二、三人だけが別になって、横になっている者たちの間を廻っている。呼び出しがつづいて、名ざされた家長たちが次々に立ってゆく。命令を受けると、星を見上げながら帰って来る。女たちも小屋から外へ出ている。女たちは自分たちの家の入口の下にかたまって、口かずも次第にとぎれがちになってゆく。すると、最初は二、三人の祭司に先導されて、集まる者が増すにつれて次第に大きく、男たちの家（バイテマナージョ）の奥から、それに広場から、歌や、吟誦する声や合唱が聞え始め、それが夜中つづく。（室淳介訳『悲しき南回帰線』一九五五年、邦訳一九五七年）

この二十世紀の裸族について、かれはまた、「民族誌学者としての務めを果たすには、私はあまりに疲れていたので、日が落ちるとすぐに、疲労と暁までつづいた歌声とで神経を苛立たせながらうとうとと眠った。その上、こうした行事がこの部落を去るときまで毎日のようにつづいたのだった。夜は宗教生活に充てられていて、原住民は日の出から昼すぎまで眠るからだ」と別の箇所ではぐちをこぼしている。夜行性動物のような未開生活者の生態が昼行性動物と同じような文明生活者を悩ませるのだが、大切なことは、そのボロロの広場の夜の行事が、次の日中の実務の手配からはじまることではなかろうか。生活のための労働に対する計画と手配のような準備と、歌と踊りが結びついて、ボロロの夜の行事の階程を構成している。ボロロ族の部落は、中央に広場を持つ環状集落で、ちょうど、日本の縄文時代の姥山貝塚（千葉県市川市）の直径五十メー

トルの円型広場を取り囲む集落形態[1]や、南堀貝塚（横浜市港北区）の馬蹄型広場を持つ集落形態[2]や、を髣髴させる形状を持っているが、その広場でストラウスのいう「明日の命令」が伝達されはじめる夜は、実は、企画・差配→舞踏→仮眠→狩猟・採取労働というリズムを持つ原始・未開生活の一日の最初の段階がすでにはじまっているのではなかろうか、と思われる。

地球の文字どおりの対蹠的な位置に住むボロロ族の生活からは、原始・未開一般の推定しか許されまい。わが国の原始のつねの日々の、夜の具体的な個性は、いまのところ推測のいとぐちもないが、もの日の夜が〈聖なる半日〉であり、その神聖な半日と白昼の間には、劇的な神々の退場がくりかえされていたらしいことだけは、考えてみることができる。ずっと後々までも、祭の夜の神々の退場の時刻は、つねに劇的であった。

湯ばやしの舞は、舞子の中でも、もっともすぐれたものから採る。しかも舞いそのものがはなやかなところから、見物が期待の的となっている。湯ばやし湯ばやしと前夜からいい暮していた舞いである。……舞いの番数もおわりに近づいて、夜もどうやら、あけてきた頃である。舞戸のすきからみえる谿むかいの山が、雪で白く光っているのも、いかにも冬の夜明らしい気持である。夜っぴて、どなりわめき踊りぬいた「せいと」の客達も、さすがに疲労したのか、人影もだいぶまばらになったときだ、長い長い「おきな」のかたりがおわって、これまでとは一種異なった壮快な拍子がおこってくる、湯ばやしの呼出しである。そら湯ばやしだと、人び

とは急によみがえったように、近所の家などへもぐりこんで転寝していたらしい連中も、女も子供もわれがちにあつまってくる。（早川孝太郎『花祭』一九三〇年。一九五八年の岩崎書店版に拠る。）

早川孝太郎は、三河の北設楽（したら）の村々の花祭の夜明けを、こういうふうに叙述することからはじめている。

だんだん次第もすすんで、竈の前の式がおわり、竈の「くろ」へうつる。釜にはあたらしく水がおぎなわれて、竈には薪がどっしりとくべられている。いまやっているのが袖しぼりだ、もうすぐ鳥とびだ、鳥とびにかかったら湯をふりかけられるぞ、そら片手湯立てだ、束子（ゆたぶさ）を湯へいれたなどと一時にうきあしだった際に、わっとあがる歓声とともに、さっとのぼるまっしろい湯けむり、なまあたたかい湯沫がもう顔へとんできた、われ勝ちに逃げる馳けだす、拍子は一層急になって、太鼓をうつ者は懸命に叩いている、四辺は狂乱の渦中である。もうもうとのぼる湯気の中を束子をかついで舞子がはしる、逃げた見物がまたひきかえしてくる。……こうして舞戸から神座へ、ありとあらゆるものが、水だらけになってしまうのである。

そして、いよいよ朝鬼の舞になる。「役鬼」とも呼ばれる「朝鬼」（あるいは「茂吉」ともいう）が多数の鬼を従えて登場して舞う。「いずれも異相をあらわしたもので、神または神に近いものと考えられ」ていて、鬼に対する村の人々の考え方は、「畏怖というより畏敬の方である」と早

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.